

# 新

# 8

# 2017

新加坡南洋商报



# 結夏の雨

能村 研三

## 不便のすすめ

テレビを見ていたら「不便益」という言葉に遭遇した。辞書を引いても出てこない言葉である。近年はビジネスや社会では「便利」「最短」「効率」を追求する仕事の進め方や、企画の考え方が優先される。便利≡豊かな社会という発想で、不便はすべて「悪」という考え方になる。

夏至の夜活字のくぼみいとほしむ  
甚平着て気骨反骨貫けり  
水打つて蛇足の雨もいただけり  
その日のうちに帰ってきてしまふ。

木の家の木の音寧し更衣

最近は何句会の運営方法も変わってしまった。小短冊にしたためたものを皆で清記するのだが、三句ごとに小さな清記用紙に書き移したものに

浮人形 真正直は寂しかり

酒肆にゐて梅雨の気儘と付き合へり

樹も草も結夏の雨にしづかなり

逆吊りのドライフラワー―避暑期来る

くぼみあるバイオリンケース 巴里祭

毒見役 そのまま 嵌る 蝮 酒

を出席者に回覧し、必死でノートに予選句を書き溜めて選句した。隣の人の選句の速さが気になりプレッシャーがかかるともあった。しかし、近年は効率を優先するあまり、三、四十句を書いたものをコピーで回覧するようになった。書いて頭に入れるよりも、コピーを見ただけの選句になった。いちいち書き写す手間は無くなったものの、自分の手を動かさなくなった分だけ、字を覚えなくなり、頭に入る記憶もやや薄くなったような気がする。

こうして考えると俳人にとって、物事が便利になったことでその益が多くなったとは思にくい。

先師登四郎は第一句集『咀嚼音』をまとめた後旅に出た。自らの作風の転換を図るため、当時秘境と言われた飛騨白川村を一人で訪ねて『合掌部落』の大作をまとめて世に問うた。この時を振り返って登四郎は「戦慄に近い感動で立ちつくした」と思いを述べているが、この感動も不利益がもたらしたものに違いない。

# 蒼茫集



生き下手

小山田子鬼

生き下手の泳ぐ手足を見つめをり  
死後眠るふるさとの土茨の実  
生きるべく生きて今あり夏扇  
仏壇に減りゆく数のさくらんぼ  
死を軽しと言ひし友あり夕ひぐらし  
\* 生きることの今あることの蝸牛

子の顔

安居正浩

もう入ること無き海の海開き  
\* 明るさに不安のきざす夏来る  
まづ椅子を広げ夏野を描きはじむ  
螢籠死者の休らふ暗さあり

子燕の口の大きき競ひあふ  
父の日のスマホに子の顔孫の顔

父の日

辻美奈子

\* 父の日の港は腕ひろげをり  
亀の子の泳ぐといふは流さるる  
網戸打つこたびの虫は何なるや  
混沌のをはりの蓮の浮葉かな  
\* 走り梅雨校庭に砂撒いてあり  
青春は今しかないぞさくらんぼ

舟下る

杉本光祥

花ふぶく文士通ひしハケの道  
植田いま霊峰富士の三面鏡

そいやそいや声が昇き上ぐ神輿かな  
\*世事知らぬ文学館の墓  
脈々と直哉旧居の岩清水  
万緑の瀬しぶきかはし舟下る

法王も 千田百里

\*夫生れし日なり泰山木開く  
法王もマリアカラスも居るばら園  
客席の廻る劇場とや涼し  
夏の夜の人釣り上げてエレベーター  
夏至の日の卵生みをり烏骨鶏  
百噛んでかんで夏野の牛であり

静かな力 今瀬一博

一画は父祖の墓なり田水張る  
二番蚕の一心に食む身じろがず  
著莪の花ごぼりと鯉のもぐりけり  
\*百咲いて百の孤独の白牡丹  
竹落葉波紋に音の吸はれけり

小筆もつ静かな力蝉生まる

小回り 楠原幹子

珈琲は深煎り初夏のログハウス  
ほうたるや草の湿りのまつはりて  
螢火のひとつに氣息合はせをり  
\*小回りのコミュニティバス花柘榴  
白玉や流行り廃りの外にゐて  
生くるとはかくも単純海月かな

定型 宮内とし子

\*白玉に定型の窪ありにけり  
薫風の素通りしたる枯山水  
師の墓所のおかるさ緑雨やんでより  
走り梅雨根津もはづれのなんでも屋  
ほたるぶくろ下町の路地退屈に  
一斉に動く百の眼初螢

麦の秋 宮坂恒子

藍甕のやうな火口湖日の盛り  
風青しひよこ千羽の舞る声

\*刈り進む一人にどつと麦の秋

大漁旗ひるがへしたる青嵐

貸し馬の吐息をほのと夕薄暑

黒南風は千の仏の唸りとも

大夕焼 林昭太郎

瓦斯の焰の青くしづかに新樹の夜

\*錠剤に一筋の溝みどり射す

冷麵を待ちつつ就職情報誌

青りんご高く投げ上げ変声期

虹消えし後を充たして街の音

空と海いま契りしか大夕焼

遠郭公 吉田政江

遠郭公晴れ渡りたる至仏山

\*一斉点灯ナイターの芝浮き上がる

夏場所や花道風の出入口

息吸つて重心正す西瓜割

北上北上二句の逢魔が時よ遠き雷

舞ひ終へて肩で息する鬼踊

走行距離 秋葉雅治

\*一生の走行距離を知る薄暑

ぬばたまに白き一条祭髪

あす勢ふ形に乾され祭足袋

発議、審議、決議の順に涼意増す

雨意満ちて紫陽花はいま変化どき

発想の湧くや抜けゆく籠枕

帰巢本能 甲州千草

本家まで近くて遠し夕蛩

太陽に先回りされ蝸牛

ぼうたんの傾き合うて相触れず

\*鉄線花振ぢる力を鍛へをり

酒に噎せず水にむせゐて日焼濃し

生麦酒帰巢本能失せがちに

郭 公 森岡 正作

田植終ふ吾も一国の城主たり  
郭公の一声朝を研ぎ澄ます

\* 甚平のもぬけの殻の干されあり  
流木のまた流れたき走り梅雨

あめんぼう足手まとひのもの持たず  
深井戸に青葉若葉の闇重ぬ

散水車 広渡 敬雄

箬袋折りて箬置く柿若葉

\* 荒梅雨を耳で楽しむ檜風呂  
ため池のみどり濃くなる芒種かな

渋滞の中に一台散水車  
連結のまま車庫に入る夏の月  
手花火の地に滲むとも弾くとも

白づくし 藤原 照子

スイッチバック遠近の山笑ふ  
老鶯や連袂句碑へ坂急ぐ

緑蔭に埋もる鐘楼より一打

\* 先師の忌ほたるぶくろの白づくし  
ひらききるまでの睡蓮との対峙  
騒雨過ぐ身のいささかの立直り

時の束 田所 節子

自転車の先頭は父麦の秋  
竹皮を脱ぎて自炊を始めけり

\* 水入れてアイロン使ふ走り梅雨  
雲の峰古紙てふ時の厚き束  
生き方に正解はなし通し鴨  
梅雨満月金の薄雲かかりをり



# 潮鳴集



片寄れり

内山花葉

\*電車にも片陰のあり片寄れり  
浅酌低唱父の日の甚句  
吾を入れて地球は青き金魚玉  
口といふ口こそ命つばめの子  
巴里祭つま先尖る銀の靴

ゆつたり

菊地光子

\*長考の甚平かこみゐる甚平  
日盛やナイフ光りの魚過ぎる  
風はらみゆつたり戻る夏暖簾  
郭公や森のむかうのモノレール  
靖國の青葉は影を重ね合ひ

書けぬ夜

井原美鳥

\*枇杷熟れてとうに絶えたる無尽講  
まざまざと水の輪郭金魚玉  
風鎮のかすかなる揺れ百合ひらく  
徹の書の侵食寝間におよびけり  
\*書けぬ夜は読みに安らふ火取虫

アルト

栗原公子

\*青葉風何に並びし人の列  
万緑を来て山頂の磁石盤  
整列のひまはり一本づつ孤独  
小さくなれ気塞ぎの種枇杷の種  
\*アルトならむ牡丹に声ありとせば



遠き恋

荒井千瑛子

白薔薇の溢るる垣や遠き恋

\*まくなぎを抜くれば闇のやはらかし  
憤死にも似て牡丹のくづほるる  
月涼し累積遺跡秘めし地の  
筒姫の金糸切り置くごとき月

地下組織

岡真紗子

浮雲をくすぐつてゐる今年竹

迎へ打つ草矢思はぬ方へ飛び  
\*蕺菜を抜くや手強し地下組織  
沼たひら河骨の黄のぽつと咲き  
唐国に知る梅檀の花淡し

綿のシャツ

高久正

竹皮を脱ぐ親離れする気配とも

梅雨雲の宙へ高飛ぶ海豚シヨ  
白南風や肌こちよき綿のシャツ  
\*着陸へ総の植田を傾けて  
桐咲いて水田あかりの長屋門

鉄線花

菅井悦子

たかなや父母なき郷の絆とも  
空真青墨痕太き幟立つ

\*葉脈に磁力を秘むる鉄線花  
水無月や森きらきらと膨らみて  
遠青嶺膨らみ描く放物線

山河

七田文子

遊び田に雲の流るる茅花風

所在なく回転椅子にゐる薄暑  
ほーたる来い黄泉の父母連れて来い  
\*蛍飛ぶ闇に山河のあるやうに  
蛍見し夜はわが部屋の灯を絞る



# 飛鷹選評



能村 研三

白靴が檢札に來て恭し 兵藤 恵

最近の旅に出た時、列車の車内での切符の檢札が省略されているところもあるが、夏は白服の銚道職員が列車の席を回って座席指定券と乗車券の檢札を行う。礼儀正しくてきばきと檢札を行っていくのは見ていると気持ちが良い。足元も白靴で清潔感があり何の嫌味もない。寝ているのを起こされたり、不正乗車を咎められるのかと思うと不快感を感じる人もいるかも知れないが、接客術にたけた紳士的な鉄道マンの接客に旅も楽しく続けられた。

摘芯の指に炎暑の闇宿る 吉武 美子

草花は、放っておくとどんどん茎を伸ばして花がつきづらくなったり、姿が乱れたりしてしまう。そこで、元気で丈夫な草花を育てるために摘芯の作業を行う。これで、株を小さくまとめ、風通しや株元への日当たいを改善し、生育を促すことができる。炎暑の作業だが、鋏を握る手に闇が宿った。

慕ふがに薔薇炎えたつや白桜忌 大石 恵子

白桜忌は五月二十九日の与謝野晶子の忌日。薔薇の花を愛し、

薔薇の詩を多く発表した晶子に相応しい季節である。「木の間なる染井吉野の白ほどのほかなきいのち抱く春かな」という歌を残している。晶子は生前より、まわりの人に自分の戒名は「白桜院」をつけてほしいと洩らしていた。炎えたつ美しい薔薇を見て晶子の情熱的な偉業を偲んだ。

少年の心直かれ今年竹 榎本 秀治

今年竹は若竹とも言うが、皮を脱いで生長した今年の竹は幹の緑が若々しい。真つ青な空に向かってすつくと伸びた若い竹は、純真無垢な少年の心とも呼応する。いつまでも、この気持ちを忘れないで真直ぐに育ってほしいという願いを込めている。

はつ夏や鈴音と来る明荷馬 大久保志遼

大久保さんは名古屋の方が、昔から名古屋は派手な結婚式が行われる所ようだ。「名古屋で娘が三人いたら家が傾く」「嫁をもらうなら名古屋から」などとよく言われる。明荷とは竹あるいは莫薩で作った旅行用のつづらのことで、婚礼の際嫁を乗せる馬で、明け荷を馬の荷鞍の両脇につけて、その上に布団を敷く。昔の嫁入りの風景を思い出しているの句であろうか。

薔薇の名はトランペッター日を弾く 伊藤 照枝

薔薇にはいろいろな名前がつけられていて、花の色彩や花の姿からイメージが広がってきて面白く。華やかな花姿には堂々とした風格がある。薔薇は可憐で華やかな花であるが棘もあるのでイメージが広がる。トランペッターは美しい音色を高らかに奏でる楽器だが、薔薇を見ているとその音色が伝わってきそうだ。(以下略)

# 沖作品



## 能村研三 選

鉄亜鈴梅雨の重さの付いてをり

ももいるの麩菓子吊りて金魚売

白靴が検札に来て恭し

割箸に帯の真白や夏はじまる

踵かぬうちに茅の輪を出でにけり

畝幅に刈る節足車両大茶園

摘芯の指に炎暑の闇宿る

青嵐幼な操る瓶め船

新茶汲む体感温度下ぐ居蔵

枝撥ねて大き実梅を取り零す

くれ泥む夏至噴き上ぐる間歇泉

慕ふがに薔薇炎えたつや白桜忌

指先に記憶の戻る螢籠

由布岳の雲を捲りて夏来る

母の日の雲居や母の顔知らず

静岡

兵藤 恵

福岡

吉武 美子

大分

大石 恵子

茨城

榎本 秀治

愛知

大久保志遼

福岡

伊藤 照枝

豆飯や日々の暮しのいとほしく  
胞衣塚の石におしめり青時雨  
少年の心直かれ今年竹  
余韻なほ祭りの後の迎へ酒  
虎が雨いくさ語りの薩摩枇杷  
はつ夏や鈴音と来る明荷馬  
そら豆の花や薬師の百度石  
麦秋のさなか在所の凱旋門  
なら町は四方に鐘の音明易し  
どての味噌甘く匂ふや走り梅雨  
新樹光窓辺に並ぶミシンかな  
咲き誇る薔薇の煉瓦の邸かな  
薔薇の名はトランペッター日を弾く  
歩して知る町の歴史よ若葉雨  
雨上りポピーはそよぐ花であり